

平成 30 年度 プロジェクト研究費研究実績報告書

令和元年 5 月 8 日

代表者 増田 早哉子

研究課題名	聴覚障害児の「きこえ・ききとり」とワーキングメモリとの関連の検討
研究期間	平成 30 年 4 月 1 日 ~ 平成 31 年 3 月 31 日
共同研究者	
1. 今年度の研究概要	
<p>【背景と目的】</p> <p>本研究は、聴覚障害者の社会参加を促進することを目的とし、聴覚障害児の「きこえ・ききとり」の改善を目指すための実験心理学の基盤的な研究である。</p> <p>先天的に失聴した聴覚障害児は、音の聴取の困難さのみでなく、音に対する暴露経験が低いことにより音声の聞き取りや聞き分け能力も未習熟であることが知られている。聴力検査の結果である聴力レベルと、この「きこえ・ききとり」成績は必ずしも一致せず、聴力が高いにも関わらず「きこえ」が悪い例もみられる。</p> <p>そこで本研究では「きこえ・ききとり」遂行障害の要因の一つとしてワーキングメモリ（以下、WM）に焦点をあてる。短時間に頭の中で情報を保持し操作する能力であるWMの成績が、聴覚障害児の「きこえ・ききとり」課題の成績とどのような関係にあるか検討し、さらにWMの成績向上が「きこえ・ききとり」の課題の成績に及ぼす影響について併せて検討を行った。</p>	
<p>【手続き】</p> <p>聴覚障害児の WISC-IV の結果（）より、ワーキングメモリ成績を求めた。ワーキングメモリの成績によって対象児を二群（高群・低群）に分け、さらに、年齢、聴力（軽中度難聴・高度難聴・中度難聴）、補聴（人工内耳装用・補聴器装用）、失聴時期などの条件別に、それぞれの群のきこえ・ききとり成績の推移を記録・分析した。</p>	
2. 研究の成果	
<p>【結果】</p> <p>現在、3 歳から 16 歳 42 名の聴覚障害児の、きこえ・ききとり成績の記録が分析されている。分析の結果、ワーキングメモリ成績高群において、同低群と比較したときに、ききとりの成績に有意な差がみられることが明らかになっている。</p> <p>ただし、本研究では比較対象群となるべき健聴児のデータは未だとられていない。また、障害の程度には個人差があるため、年齢、聴力（軽中度難聴・高度難聴・中度難聴）、補聴（人工内耳装用・補聴器装用）、失聴時期などの条件別に群分けする必要があるが、現時点での被験者の人数は、各条件別に分析を行うためには充分ではなく、更なる対象の拡充が求められる。</p>	

3. 研究成果の公表実績・予定（年月日、方法）

【研究成果公表実績】

2018年日本心理学会において、関連研究の発表

【研究成果公表予定】

2019年度内に、聴覚医学会または特殊教育学会にて、学会発表予定